

## 第4回 第五期武蔵野市コミュニティ評価委員会 要録

日 時 令和6年11月21日(木) 午後7時～午後9時20分

場 所 かたらいの道市民スペース

出席者 渡邊委員長、町田副委員長、小山委員、高橋委員、青木委員、木村委員、毛利委員(名簿順、敬称略)

事務局(事務局市民活動推進課長 ほか3名)

欠席者 なし

傍聴者 4名

### ■ 次第

1 開会

2 議事

(1) 全体に共通する論点について ※第3回委員会 資料4

・ 前回の討議未了項目

「ボランティアに関する意識の変化」、「企画づくり」、「外部との連携・交流」

・ その他

前回討議事項に関する補足意見等

(2) 報告書素案について ※資料1

・ 「第1章 評価の目的と流れ」～「第3章 評価の結果」について

・ 「第4章 総評」について

3 その他

4 閉会

### ■ 配布資料

前回資料4 全体に共通する論点について

資料1 報告書素案

資料2 コミュニティ協議会の主な事務

参考資料 第3回委員会 傍聴者意見1

参考資料 第3回委員会 傍聴者意見2

## 1 開会

### 【委員長】

第4回第五期武蔵野市コミュニティ評価委員会を開会します。本日はご多忙の中お集まりくださりありがとうございます。皆さまと楽しくかつ有意義な話し合いができればと思います。

### 【事務局】

本日の議事は大きく2項目あります。「(1) 全体に共通する論点について」では、前回委員会の議論に引き続き、積み残しの論点についてご意見いただき、「(2) 報告書素案について」では、第3章の協議会へのコメントについて本日あるいは後日ご意見をいただきたいのと、第4章の総評では共通論点また行政への提言について項目の立て方を含めてご議論いただきたいです。

今日のご議論を踏まえて、正副委員長とも打合せをしながら報告書案をまとめ、最終回となる次回の委員会にて委員の皆さまから意見をいただきながら、報告書を取りまとめます。どうぞよろしくをお願いします。

### 【事務局】 資料の確認

### 【委員長】

本日の委員会で素案への意見出しを行い、次回の委員会で報告書のとりまとめを行う流れです。その心づもりで議論を進めていければと思います。

## 2 議事

### (1) 全体に共通する論点について

### 【委員長】

前回の議論の続きとなりますが、事務局より補足の説明はありますか。

### 【事務局】 事務局説明

#### ➤ ボランティアに対する意識の変化

### 【委員長】

はじめに「ボランティアに対する意識の変化」についてです。近年、ボランティアでは「自分が興味のあることのみをやりたい」という声が増えており、あらゆる分野を含む「地域づくり」に関心をもってもらうことが難しくなっています。こうした現状をどう考えるか、皆さんから意見があればお願いします。

### 【副委員長】

前提として、ボランティアとして自分の興味のあることや得意なことだけに携わり、その他のことには積極的に取り組まないことの是非が議論になると思います。一部の分野しか携わらない人がいてもいいのか、あるいはそうした人を他の活動にも引っ張りこむべきなのか、もし引き込むならその方法論が議論になると思います。

### 【委員長】

本委員会として、どのようなボランティア像でコミュニティ協議会の運営をすべきと考えるか、という本質的なご意見をいただきました。委員の皆さまいかがでしょうか。

### 【A委員】

あらゆる分野に幅広く関わって参加する人が一番ありがたいとは思いますが、参加してみよう

と思う側は、一度関わると自分がどれほどの役割を担うことになるのか見えないのは参加の負担になるので、まずは自分が関わりやすいところから参加できることが大切だと思います。例えば吉祥寺南町コミセンでは、コミュニティ食堂の取組みがありました。時間はかかるけれど、そうした特定の取組みに力を入れたいと考えている人も広く呼び込み、時間はかかるけれど、そこからの活動の広がり育てることが大切だと思います。

また、例えば、八幡町コミュニティ協議会ではPTAの関係者に声をかけて、コミュニティ協議会に参加を促していました。そうした形で参加した方は、必ずしも最初からコミュニティづくりが目的で参加している訳ではないと思います。そうした方を繋ぎとめたり、活動の幅を広げてもらったりするためには、「参加するのが純粋に楽しい」と思える仲間づくりなどの仕掛けが必要だと思います。

ただ、人々が関心のあるものを用意するためのお膳立てが、コミュニティ協議会の負担になっているとも感じます。本委員会で議論すべき論点は、企画のつくり方の支援あるいは企画のメニュー化、声のかけ方などなのではないかと思います。

#### 【B 委員】

ボランティアならば自由であるべきだし、嫌なことの強制は、原則あってはならないと思います。コミュニティ協議会との意見交換会で、運営委員になると負担感が増え「ボランティアでそこまで担えない」と身を引いてしまう方もいると聞きました。重荷になることをはじめから強いては活動が広がらないと思います。やりたいことがあるなら、それをバックアップする形で支援ができると良いと思います。

#### 【委員長】

ハードルを上げすぎると、自由にやるというボランティアのスタンスからズズれてしまうというご指摘でした。自由さと、運営においてやらなければならないことの両立は重要な論点だと思います。

#### 【C 委員】

ネットワークコミュニティという考え方があります。小さな団体が地域に多く存在するなかで、自分たちの課題を解決するためには他の課題も解決しないといけないと気づき、自然とコミュニティになるという発想です。これをコミセンに関わる人に当てはめて考えると、第一段階では、まず緩い関わりをしてくれる人の層を分厚くするために、コミセンで様々なメニューを用意し、部分的にでも興味のある人を集める取組みが必要だと思います。第二段階では、もう一步関わりを深めてもらうために、関わることを楽しめることと、活動を続けていくための課題を共有できる場の用意が必要だと思います。そうした場の設定により、ある程度の責任を負わなければこの活動を楽しく続けられないことに気付くことが期待されます。やはりボランティア活動に深く関わるためにはある程度、義務的なことや責任を負わなくてはいけないので、その部分を受け入れてもらうためのコミュニケーションの場の設計が大切だと考えます。

また、積極的な声かけや周囲の人を巻き込む力はやはり大切だと感じます。ある調査結果では、男性は自発的に取り組むより、ある程度強制力のある組織で責任を負って活動する方が参加しやすい傾向がありました。責任を負ってこそ楽しさに気づく側面もあるので、コーディネート力やファシリテーションの力も必要だと感じます。

#### 【委員長】

男性は役職与えると動き始める傾向、女性は役職を担うのは怖いと感じる傾向があるという話があります。

また、特定の活動に関心があって活動を始め、活動に取り組む中で、自分の関心事のみに取り組んでも課題を解決できないことや、活動を継続できないことに気づくことがあります。例えば、被災地の支援をしたいと思った時、支援を始めてみてこそ、活動を継続するためには、後のサポート体制を考える必要があることや、支援継続のためにはお金が必要なことに気付くというようなことです。そうした気付きの仕掛けをつくるのが大切だと思います。わたしの経験からは、サポート体制の重要さに気が付く前に活動内容のハードルを上げすぎると参加しづらくなってしまっているので、その点は考慮が必要だと思います。

#### 【D 委員】

ボランティアは自由とはいえ、好き勝手にいい訳ではないと思います。やりたいことを実現するために、取り組んだ方が上手くいくこともあると思うので、好きなことしかやらないのは違うのではないかと感じました。運営側がコミュニティ活動のなかで目指すものを理解し、新しい方に参加してもらうためのハードルを下げつつ、さらに引き込むためのステップを考え、準備することが重要だと感じます。

#### 【B 委員】

私は今ボランティア活動をしています。参加した際に自分が担う役割をすぐに案内されると、義務感に重たく感じます。仕事とは異なるので、負担と感じれば後ずさりするのは自然なことです。私が今、ボランティアを続けられるのは、団体のメンバーが、楽しく活動しているのを背中で見せてくれるからです。人間関係がある程度できてこそ、義務的な仕事も担う気持ちが出まると感じます。メンバーになった途端に仕事が割り当てられるのは厳しいのではないのでしょうか。

#### 【委員長】

ご指摘のとおり、やらされ感は辛いものです。楽しいことに関わるうちに巻き込まれ、気が付いた時にはそこが自分にとって大切な場所となり、その大切な場所を守るために頑張る、という流れなら一層頑張れることもあると思います。そうした意味で、「コミュニティ協議会という場所が大切」等、大切なものをつくることは重要だと思います。例えば八幡町コミュニティ協議会では「いつ休んでも心配いらないよ」と言ってもらえるからこそ、運営委員にとっての大切な居場所になっているのではないのでしょうか。協議会自体が良い居場所になることが、広い意味で参加しやすい団体に繋がると感じます。

#### 【E 委員】

コミセンの運営委員の多くは、ボランティアがやりたくて関わっているのではなく「コミセンのイベントに参加したい」という気持ちで参加を始めた方が多いと感じます。体感では、イベントの直前の準備の際に「ここを手伝ってほしい」とか「どうしてもあなたにやってほしい」とか具体的にお願いすると結構動いてもらえるように感じます。

#### 【委員長】

ご指摘のとおり、具体的に伝えることが大切だと思います。また「ボランティア」は日本語としても抽象的で新しい言葉です。「コミセンの運営を担っているのはボランティアです」と発信する場合にも、その言葉がどう解釈されるかを注意することは必要だと思います。

そのほかにご意見ありますか。特に無いようですので、次の論点「企画づくり」の議論に移り

たいと思います。

## ▶ 企画づくり

### 【委員長】

企画づくりへの意識は、負担感を含めて、協議会によって異なると感じました。「企画をしたい」という思いの強い協議会もあれば、「やらなければならない」という意識の協議会もありました。

### 【副委員長】

窓口担当が年間の企画を考慮してお膳立てをしている協議会がありました。それは大きな負担だと思います。また「事業をやらないといけないのか？貸館で利用者に喜ばれているのだから、それで十分ではないか」という声も聞かれます。コミュニティとコミセンの関わりが理解されなくなってしまっているからだと思います。

今後は「コミセンに、外部団体の企画をどう取り込んでいくか」という視点を持つことも大切だと感じます。吉祥寺南町コミセンでは「南町居場所プロジェクト」という仮想の企画集団をつくり事業を企画しています。私もその団体のメンバーの1人です。コミュニティ協議会のなかで企画づくりを議論してもなかなか話が進まないの、あくまでもコミュニティ協議会とは異なる団体として企画をつくり、コミュニティ協議会の運営委員会に持ち出しています。コミュニティ協議会はその事業に協力する形で、子ども食堂やフリーマーケットなどを実施してきました。ただ、同時に、コミセンがそうした企画集団から請け負った事業を共催するだけの、単なる箱物になってしまうのではないかという不安があります。

### 【C委員】

企画づくりは館によって状況が異なると感じ、一律に何らかの助言をするのは難しいと感じています。事業の企画に消極的なところや、企画は実施したいがその準備を負担に感じているところ、学生に一部の企画・運営を任せているところなど様々ありました。

本委員会で議論したいと思うのは、企画づくりに関して何を理想と考えるかだと思います。社会の潮流として、自治会・町内会等の力が弱くなり、1つの団体が地域を代表することが難しくなっているなかで、複数の団体が名を連ねて協議会として取組むことのイメージは持ちやすくなっている一方、コミュニティ協議会がコミュニティづくりを担うという意識が共有されづらくなってしまっていると思います。コミュニティ協議会として事業の企画ができれば当然いいですが、もし外部に事業を企画したい団体があるなら、そこに任せるのも大切だと思います。それを認められるかはコミュニティ協議会によって判断が異なるのだらうと思いました。

### 【B委員】

なかには、企画づくりに学生等、若者が関わって上手くいっているコミュニティ協議会もありました。上手くいくかはコミセンの立地等にもよると思いますが、やはり良い取組みを他のコミュニティ協議会にも広げられたら良いと思います。学生には、従来の運営にはなかったセンスや発想等があると思います。またコミュニティ協議会の外から企画を持ち込むなら、同じテーマの企画を他のコミセンで実施する等、事業を共有できるのではないかと思います。コミセンが箱物化してしまう心配がありますが、外部からノウハウを学び、自分たちでも事業の企画や運営がしやすくなるようになれば、なお良いと思います。

一方で、もし企画づくりが難しいのであれば、必ずしも年に何回企画しなければならないとっ

た意識は持たずに、人と話せるコミュニケーションの場を提供する日常的な活動を充実させるだけでも十分なのではないかとも思いました。

#### 【A 委員】

企画づくりは、コミュニティ協議会のみが担うことには限界があるのだらうと思います。複数の団体が関わる実行委員会方式で開催されているお祭りに参加した時、会場には驚くほど多くの子どもがいて、お父さんバンドなども賑わっていました。その時、「なかなか自分たちだけではできないことを、こうした形で実現できると楽しいね」という声を聞きました。各団体がしたいことを持ち寄り1つの場所で開催することも大切で、その点では、コミセンという場は開催場所として強みになると思いました。

子どもに関連して、よく転入者等から「子どもと一緒にいける場所を知りたい」という要望が寄せられます。こうしたニーズにコミセンのウェルカムな姿勢がマッチすれば、特別なイベントを企画しなくても、若い世代に来館してもらえるのではないかと思います。また、それが若い世代にコミセンを認知してもらい仕組みに繋がれば良いと思います。

#### 【委員長】

なぜコミセンで企画を実施するかは重要な視点です。コミセンで企画を開催することで、多様な人にコミセンに来てもらい、新しい関わりをつくることができます。子どもとの関わりは、将来的な担い手や支援にも繋がるかもしれません。ただ、企画づくりをやらされるのは辛いのも事実です。ある特定の分野に関心があり専門的にやりたい人がいるなら、場の提供等、協力・共催の形をとれると思えます。もちろんコミュニティ協議会のなかに企画づくりをしたい人がいれば良いですが、地域づくりのための事業を全て自前でやる必要はないという意識も大切だと思います。やらされ感に疲れて運営委員を辞めてしまうこともあるので、無理してまで事業を企画しなくていいことへの全体のコンセンサスも得ておいた方が良くと思います。貸館にかかる負荷が大きいところなど、状況はコミセンごとに異なります。そうした多様性をみながら考えていければいいと思います。

その他ご意見ありますか。いったん無いようですので、次の論点「外部との連携・交流」の議論へ移りたいと思います。

### ➤ 外部との連携・交流

#### 【委員長】

企画づくりに地域の方に関わってもらうためには、そもそも連携や交流が大切です。先ほどの論点とかなり近い話になるかもしれませんが、皆さんからご意見ありますか。

#### 【E 委員】

西部コミセンは大規模改修工事に伴う休館中ですが、運営委員会は毎月継続して開催しています。運営委員会のなかで、建物を使ったイベントの開催は難しいのですが、例年開催している映画会をどうにか開催したいという話になりました。開催場所や申し込み方法など様々な課題はあるなかで、珍しくこの時は意見が合わさったのでうれしかったです。

#### 【委員長】

逆境のなかで、新しいつながりが見えた事例の紹介でした。ぜひ地域フォーラムの枠組みも活用して開催していただきたいです。皆さま他にいかがでしょうか。

私から1点、団体用のロッカーの設置についてです。コミセンのなかには、利用団体向けのロッカーを設置しているところがありました。ロッカーの設置は、コミセンのスペースをとってしまいが、定期的にコミセンに人が訪れる仕掛けになると思います。ただ、どの団体の利用を認めるかなどの合意や、ロッカー内の物品の管理責任など難しさもあると思いますが、関係づくりが難しかった団体とのコミュニケーションへのきっかけになると思います。ロッカーの設置は行政からの支援も大きいと思いますので、その辺りは積極的に考えてほしいと思います。

#### 【C 委員】

外部との連携も、プラス・マイナスの両側面があると思います。プラス面で言えば新しい人や団体・情報に触れられること、マイナス面で言えば、関係にしがらみが生まれ、それが負担になることなどが考えられます。どこの団体でもそうした苦しみがあると思いますが、苦しい状況において、他のNPO法人等に対し間口を広げることで、そうした課題を全体共通のものにできるのではないかと思います。

#### 【委員長】

コミュニティ協議会の運営委員が、民生委員や青少年問題協議会など、同じ地域におけるあらゆる分野の担い手となっている話をよく聞きます。今担っている方が担えなくなったら、全てなくなってしまうということについて、どう考えるかだと思います。同時に、コミュニティ食堂の実施にコミュニティ協議会が連携を始めており、コミュニティ食堂の担い手も青少年問題協議会以外の団体が増えています。こうした繋がりを広げていくことは大切だと思います。

#### 【B 委員】

「コミセンで既に活動している市民活動団体や同好会の中に、自分が興味のあるものがなく、他に人が集まれば自分の興味のある分野で団体をつくって活動したい」と考えている人が一定数いると思うので、そうした方を結びつける機能がコミセンにあっても良いのではないのでしょうか。取り組みたい活動についてコミュニティ協議会に申し出ると、興味に合わせて人と人を繋いでくれるといった、新しい組織の輪をつくる仕組みができれば、もっと活動が広がると思います。

#### 【委員長】

今のご意見は、既存の団体の紹介だけでなく、そこから一歩踏み出した支援ということですね。

#### 【副委員長】

吉祥寺南町コミセンでは、コミセンだよりの中に「掲示板」を設けて、個人名で人の募集をしています。コミュニティ協議会としては、団体の紹介に責任を持つことが難しいので「掲示板」という扱いにしています。

#### 【B 委員】

広報紙に個人名を掲載するのが怖いと感じる方もいるかもしれないので、そうした方に向けてコミセンが仲介できればと考えました。

#### 【委員長】

バンドメンバーの募集みたいなイメージでしょうか。「こんなことをやりたい」という気持ちのきっかけづくりですね。コミセンの強みは場があるところだと思うので、コミセンという場を活用してできる内容であれば考えられるかもしれません。

あともう1点、地域団体との関係のほか、利用者との交流に関してはいかがでしょうか。貸館業という扱いでは、部屋さえ借りられれば満足で、交流がなかなか生まれづらいと思います。

### 【C 委員】

コミセンの事業には、参加者同士がグループをつくり、地域活動を始めるきっかけとなるような市民向けのワークショップが少ないと感じました。はじめは市が関わった方が始めやすいかもしれませんが、コミュニティ協議会が全てを担うのではなく、コミュニティ協議会が活動の促進を仕掛ける側にまわるのも面白いと思います。ワークショップなら1人でも参加しやすいし、地域活動を始めることに興味ある人に向けて、アプローチするのはいかがでしょうか。ファシリテーションのノウハウを育むワークショップも考えられると思います。

### 【委員長】

場合によっては、やはり行政からの支援が必要になると思いますが、そうした事業も面白いと思います。福祉の分野では、いきいきサロンを運営する団体に対して、生活支援コーディネーターが関わって、活動場所探しや団体の立ち上げの支援を行い、最終的には自主運営できるようになることを目指す取組みがあります。立ち上げの支援と場所の提供をコミセンが少し意識して行うことや、利用者に参加を促すことは、少し大変ですが方向性としてはあり得ると思います。

### 【C 委員】

多摩市に、市が仕掛けた事業の1つに「若者会議」というワークショップがあります。若者会議の参加者が、ワークショップで培ったファシリテーションの力で、市内のさまざまな地域に支援に向かいます。特定の団体に対してではなく、複数の団体に対し横断的に関わる人を育む仕掛けも良いのではないのでしょうか。そうした意味で、複数のコミセンを助ける団体があっても良いのではないかと思います。イメージとしては、隙間時間でバイトできる「タイミー」です。「窓口担当がどうしても集まらない時に埋めてほしい」といった要望にも応えられると思います。ただ、そうした横断的に活動する人材を受け入れるかはコミュニティ協議会の判断だろうと思います。

### 【委員長】

コミセンお助け隊みたいなイメージですね。

### 【副委員長】

館によって特性が異なると同時に、館によって利用者からのニーズが異なります。若い人から高齢者までがコミセンを活用しているなかで、各団体がコミセンを利用して自己実現できればいいのですが、コミセンが単なる自分たちの活動の練習場になってしまっただけではもったいないと思っています。吉祥寺南町コミセンの場合、利用団体には音楽系の団体が多いので「コミセン祭りに出てみませんか」と引っ張り出すようにしていますが、単なる練習場に留まってしまう団体が7割です。運営委員のなかには「団体が団体として練習し満足するなら、それで十分ではないか」という意見も出ます。コミセンが何のためにあるのか、どういった利用のためにコミセンを運営しているのかという意識が希薄になっていると感じます。

また、その他の工夫として、利用者懇談会に参加すると、普段は月2回までしかコミセンの部屋を予約できないところ、3回まで予約できるサービス券を用意しています。また、大掃除の時には、近くの民間業者の方にも手伝いに来てもらっています。これは、絶えず利用者懇談会や大掃除を告知している成果だと思っています。

全てのコミセン利用者が地域のことを考えている訳ではないことを前提にして、悲しいけれどこの点をどのように考えていくかだと思います。

### 【D 委員】

窓口にて利用者に対して、コミセンの設置趣旨を説明したうえで「あなたはコミセンにどのように貢献できますか」と問いかけるのは難しいですか。

**【副委員長】**

窓口トークの範疇で尋ねることはできますが、それを利用条件にすることはできません。

**【B 委員】**

私もコミセンを利用する団体には、地域向けのイベント等に出てもらう方が良いと思います。団体仲間内だけで楽しみたいだけの団体には、コミセンを貸す必要はないのではないのでしょうか。ただ楽しみたいだけなら、有料の貸しスタジオを使用すれば良いと思います。コミセンはコミュニティを広げることや充実させることを目的とする施設であることを説明し、お手伝いやコミュニティづくりに関わることをお願いしても良いのではないのでしょうか。

**【副委員長】**

利用者から、どんな団体があるか問合せを受けることがあるので、利用団体には最初に団体登録してもらっています。その時に、団体の情報を公開していいか否かという項目を設けていますが、7割の団体が非公開を希望します。例えば利用者から「俳句がやりたいのですが、こうした団体はありますか」と問合せがあっても、非公開の団体は紹介ができません。それが現実です。

また、やはり市民に広く開いているコミュニティが、利用を希望している人を拒絶することはできません。「この活動が自分のいきがいです」と言われたら、利用を断ることはできないです。

**【委員長】**

コミセンのような場を設けることで、まずは交流をしてもらうこと、さらに、そうした人に地域の課題に気づいてもらい、その解決のために動いてもらうことが理想です。例えば、歳を重ねるなかで今まで出来ていたことが出来なくなることも考えられますし、やはり入口に高いゴールを掲げるとお互いに辛いと思います。入口として、コミセンにまず来てもらい、顔見知りになってもらうことが大切です。できればコミュニティづくりに関わってほしいけれど強制はできないなかで、理想を掲げつつ現実に落としながら、どのように利用者等の背中を押せるかが課題だと思います。

➤ **広報・地域特性・その他**

**【委員長】**

広報に関しては、皆さまから多くの意見がありました。まず私からですが、コミセンのことを知らない人が多いこと、またそれが市民だけでなく市職員も知らないことは課題だと思います。やはり多様な形で広報することが重要です。ただ、難しいと感じる点として、コミセンだよりの受け取りさえ拒否されることがあることがあげられます。致し方ないとも感じますが、例えば市報で「コミセンだよりはボランティア団体が作成・発行しているもので、非常に公共性の高いものだ」というメッセージを発信することはできると思います。

他には皆さまいかがでしょうか。今後報告書をまとめるにあたり、特に重要だと思うことがあれば、ご意見いただければと思います。

**【A 委員】**

市報への掲載について市内の広報担当とも掛け合いましたが、紙面の都合で厳しいのが現状です。意識調査では市報の認知度が最も高いというデータがある一方、あるマンションで伺ったと

ころ、市報でさえ、7割ほどの人が捨ててしまう状況があるそうです。それでもやはり、コミセンの事業のほか、コミセンがある目的や存在意義について、市報等に掲載する努力を市が継続しなければならないと感じています。また、SNSなど、様々なツールでの発信が必要だと思います。このことは、委員会として作成する報告書に行政への要望として記載して良いと思います。

また最近、地域の情報を求めたり、発信したりできる「common」というアプリを活用しています。まだ知名度は低いですが、このアプリでは「子どもを連れていけるところが知りたいです」や「子どもとごはんを持ち込んで遊びにいけるところが知りたいです」といったコメントが寄せられています。こうした情報ニーズに対し、アプリと連動して場所を紹介するなど、応えていく必要があると感じています。

**【委員長】**

単にコミュニティ協議会が努力するのではなく、市でも努力できるということですね。

**【副委員長】**

全てのコミュニティ協議会が、コミセンがどのように運営されているか等を、市が市報等で周知してほしいと要望しています。

**【A 委員】**

市報だとどうしても、月に2回の発行で、原稿の締切も早く、周知のタイミングが難しいという課題があります。SNS もうまく使えば良いと思います。なかなか情報発信の制限が厳しいので、委員会として報告書への記載をしてほしいです。

**【B 委員】**

市報に限られたスペースで難しいならば、市HPを充実させたら良いのではないのでしょうか。各コミュニティ協議会のHPが充実できれば何よりですが、そうした技術がなく難しいなら、市が持つ専門的な人材で、コミュニティ協議会が活用できる標準的なフォーマットを用意することもできると思います。

**【委員長】**

重要なお指摘だと思います。全てをコミュニティ協議会で担うのは難しいので、現在取り組んでいるように、プロボノワーカーの力をかりてコミュニティ協議会のウェブサイトのリニューアルを試みるのも良いと思います。利用者も、更新する運営側も、利用しやすく分かりやすいウェブサイトづくりに向けて取り組めればと思います。

やはり、武蔵野市にはなぜ町内会がないのか、なぜコミセンのように無料で使える良い場所があるのか等、本質的な情報をもっと発信できると良いと思います。

**【E 委員】**

先日から他のコミュニティ協議会のコミセンまつりに複数回りました。お祭りのイベント案内の配布物が非常に充実している印象でした。イベント案内など、お互いに見合える機会や良いところを教えあえる機会があると良いと感じます。

**【委員長】**

イベント案内のつくり方のノウハウをコミセンごとに共有することや、一度作成した成果物のデータを共有できるオンライン上の空間を市が提供することなども考えられると思います。セキュリティ上の課題も考えられますが、大きな負担なくできる取組みだと思います。

その他、みなさまご意見ありますか。

### 【B 委員】

市のホームページについて、コミセンの紹介は施設紹介として掲載されていますが、それではコミセンの存在を知る人が少ないままだと思います。例えば「趣味の合う人と会うために、行く」と良い場所」など、閲覧者の目的を意識してホームページに掲載する方が良いと思います。

### 【委員長】

どのような目的で人がウェブサイトアクセスするかを意識して工夫することは重要だと思います。これはコミセンだけでなく、テンミリオンハウスや0123施設なども同じです。また、最近健康福祉部で総合相談窓口ができましたが、そうした窓口でも部署を超えてコミセンを地域資源として紹介してもらえると良いと思います。お互いが案内しあえる空間、あるいはそれが難しければ、ここにアクセスすれば繋いでもらえるというような窓口があるといいと思います。

### 【C 委員】

日立市の交流センターのウェブサイトが参考になると思います。日立市には、町内会・自治会がありますがあまり力を入れておらず、代わりに交流センターがあり、その点で武蔵野市と似ています。日立市の各交流センターのウェブサイトは、フォーマット化されていて、全施設が同じ形でアクセスできます。施設紹介だけではなかなか伝わらないのではないかと思います。

### 【事務局】

現状に関する情報共有です。市のホームページは現状、施設を紹介する施設案内のページと、コミュニティ構想を説明するページとが分かれてしまっているために、ご指摘のとおり見つけづらくなってしまっていると感じます。今後、うまく連動して双方を確認できる形へ改善を進めたいと思います。

また、各コミュニティ協議会のウェブサイトも課題になっており、更新が上手くいっている協議会と、更新がとまってしまっている協議会があります。今年度は試行的にプロボノを始め、地域のスキルをもった方とのマッチングを目指し、改善に取り組んでいます。現状で、プロボノで取り組んでいるのは、各協議会が思い入れのある独自のウェブサイトを持っているので、それをできるだけ生かしたいと考えているためです。もしこの取り組みで上手くいかなければ、コミュニティ協議会共通のフォーマットをつくることも考えられると思います。

次に、ご提案のあったワークショップについてです。ファシリテーターの養成講座として、コミュニティ研究連絡会と市との共催で昨年度から数年ぶりに再開しています。対象者はコミュニティ協議会のメンバー、市民、市職員です。そこでの経験をコミセンや地域団体等で生かしてもらえればと考えておりますが、道なかばの状態です。

### 【委員長】

なかなかすぐに解決することは難しいと思いますが、ウェブサイトの改善など、できることから取り組んでももらえればと思います。

## (2) 報告書素案について

### 【事務局】 事務局より説明

### 【委員長】

今回の委員会の場で特に話したいのは、第4章の総評の部分です。

冒頭の目的の部分で、前回の第4期には記載のなかったメッセージとして強調した点として、

今のコミュニティ協議会の難しさは、単にコミュニティ協議会による自主運営でなく、市と指定管理の関係になったことにあるということです。指定管理者制度に則ったことで、拘束されざるをえない部分が生じ、それに伴う事務コストも増えています。なお、第3章は、本日は時間の都合で具体的な検討は難しいので、後日ご確認ください。「総括及び今後に期待すること」ですので、課題と思ったところ、すごくよかったところ、大変だけど伸ばしてほしいところ、やめてもいいと思ったこと等、ご意見寄せていただければと思います。

では、第4章の総評の委員会全体としての意見の部分についてです。1つめ「コミュニティ協議会の認知について」委員の皆さまからご意見ありますか。

**【副委員長】**

まだまだ認知されていない感覚があります。また、コミセンがあって当たり前だと思っている人が多いと思います。自治会や町内会でごみ集積所の管理に携わったことのない人にとっては、ごみの回収も市が戸別回収することを当たり前になっていると思います。やはり、基本的なコミュニティ構想からの流れをどこまでわかりやすく咀嚼して伝えられるかと、絶えず訴え続けていくことが大切だと思います。

また、素案で気になったことが1つあります。コミュニティ条例で委員会の名前が示されている以上「評価」という言葉を使わざるをえないのは分かるのですが、「評価」という言葉が持つニュアンスはきつと感じます。各コミュニティ協議会からのヒアリング結果を記載している部分は客観的事実を記載しているのであり、「評価の結果」とは異なるのではないかと思います。冒頭の目的の部分にも、コミュニティ評価委員会の目的はこの評価活動を通して、コミュニティ協議会の日々の活動やあり方を振り返るところにあると記載されていますが、読み手には「評価」という言葉しか頭に入らないと思います。

**【委員長】**

個人的には、委員会の名前を変えられたらと思います。たとえば「コミュニティ応援委員会」などに、変えられないものでしょうか。目標をつくってそれに向けてサイクルを回すような一般的な評価はこの場面ではあまり意味がなく、むしろコミュニティの現状を把握し、コミュニティについて考え議論し、今のコミュニティに新しい息を吹きこむことが本委員会の重要な役割だと思います。

今期に関しては、別のメインタイトルをつけて、サブタイトルに「第五期武蔵野市コミュニティ評価委員会報告書」と記載するのはいかがでしょうか。そして提言のなかで、委員会の名前を変えることについて言及するのが良いと思います。

**【A 委員】**

第四章の総評が、結局厳しい話ばかりになってしまっていること、なおかつ、その課題に対して取り組むべき主体がコミセンから離れてしまっていることが気になりました。コミュニティ協議会が主体となって関われる話で言うと、企画づくりの論点で、地域団体と一緒に取り組むこと等が挙げられると思います。

**【委員長】**

ご指摘のとおり、我々委員が素晴らしいと思ったことを記載していませんでした。これまでのコミュニティ協議会の活動の意義、蓄積への称賛や、コロナ禍を乗り越えようとしてきたすごさ、前回からの進化について記載が必要だと思います。親子向けの事業が充実したことや学習室がほ

ば全てのコミセンで整備されたこと等、毎日関わっているとなかなか気が付けないけれど、10年くらいかけてみると見えることなどが結構あると感じます。また、地域フォーラムの開催など、第四期報告書に記載した内容を身に行っているコミュニティ協議会も多くあったと思います。そうしたポジティブな評価を委員会として明確に示したうえで、認知度の課題など、改善が必要な事項については書くべきだと思います。

#### 【事務局】

第4期の委員会報告書では、「情報発信」、「人材確保」、「諸団体との連携」、「気軽に立ち寄れるコミセンづくり」の4点を項目として、各項目について、各コミュニティ協議会の良い取組みをピックアップするなかで、抱える課題についても言及しました。今回は、どうしても課題の部分のみを抽出してしまっていますが、第4期で掲げた4項目は、コロナ禍を経て前進している部分もあるし、引き続き重要な項目だと思いますので、第4期の項目の出し方も含めてこれから正副委員長と協議していきたいと思っています。

#### 【副委員長】

取組んできたことは適切に評価しながら、課題も記載するということですね。

#### 【C委員】

やはり各項目について、小さな取組みでも良いので何らか良い取組みが記載できればいいと思います。認知度の課題についてもコミュニティ協議会によっては宣伝により2人参加したところや、学生が運営に関わっているところもありました。また、やはり総評に記載することは、基本的には各コミュニティ協議会へのメッセージだと思います。

#### 【委員長】

1つ大切なのは、本委員会はコミュニティ協議会に関する認知度の分析をしていることだと思います。例えば認知度に関しては、分析のなかで、単に各コミュニティ協議会が頑張れば認知度の課題が解決できる訳ではないことも見えてきました。コミセン便りの発行など、各コミュニティ協議会がかなりの努力を継続しても解決できない課題は多分にあり、そうした場合はむしろ市に非があったり、コミセンの存在が一般市民にとって当たり前になってしまった時代的影響があったりします。総評には、現状の分析と、もし課題があるのであれば誰がその課題をどのように乗り越えていけるのかという、課題解決の可能性を提言できれば良いのではないかと思います。批判を踏まえた提案だけでなく、褒めるべきところは褒めていきたいです。

#### 【副委員長】

行政への提言が多いですが、これまでやってきたことを踏まえ、さらにコミュニティを前に進めるために必要なことという書き方が大切だと思います。やはり、市に対して提案することと、コミュニティ協議会を励ましていくことが大切だと思います。

#### 【C委員】

かなり具体的な項目出しなので、項目出しの抽象度を1段階上げてもいいと思います。その方が良い取組みをしている協議会の紹介や、そうした良い取組みをお互いに参考にしてほしいといったことが書きやすくなると思います。

#### 【事務局】

ご指摘のとおり、かなり具体的な項目出しとなっているので、抽象度をもう少し高めてはどうかと思います。窓口手当については、たとえば人材の課題解決の手法の1つとして触れることも

考えられます。

**【委員長】**

コミュニティ協議会によって状況が異なると思いますが、低賃金が上がる情勢において人材が確保できない課題に対して、窓口手当だけに焦点があたらないよう注意しながら、学生の活用や、学生とつながるための支援など、いくつかの工夫を紹介できればいいと思います。

**【B 委員】**

コミュニティの当事者は、市民とコミュニティ協議会であり、本委員会で考えているのは、そこに行政を加えた三者だと思います。本委員会で作成する報告書は、三者それぞれに対して第三者的な立場からの提言なのでしょうか。例えば、市民に対してはコミュニティ協議会や市民コミュニティのことを考えてほしいこと、行政に対しては自主運営といった言葉に甘んじることなく積極的に関わってほしいこと、コミュニティ協議会に対しては行政に支援を頼むだけでなく自活の努力を継続することなど、それぞれの立場を尊重しながら、各三者がどうあるべきかを検討していくのでしょうか。私としては、市長への提言だと思っていました。

**【委員長】**

まさにご理解のとおりだと思います。市民に対しては、コミュニティに関わってほしいと抽象的に述べることしかできませんが、協議会や市に対しては、委員会としてしっかり意見を出して良いと思います。

**【B 委員】**

コミュニティに関する課題や目標を、第三者的に市長への意見として報告書をまとめる方が、読み手がコミュニティの成熟のあり方などを知ることができるように思います。

**【委員長】**

第四期までは、市に対してよりコミュニティ協議会に対しての意見が主だったと思います。今回の第五期では、当然、個別のコミュニティ協議会に対しての助言も継続して記載しますが、各コミュニティ協議会が既に懸命に取り組んでいる現状において、市がもう少し支援できる部分があるのではないかという視点から、市への意見、それも具体的な意見が比較的多くなっているのが特徴だと思います。

**【B 委員】**

つまり、報告書をまとめる立場としてはニュートラルで良いということですね。

**【委員長】**

ご理解のとおりです。

**【C 委員】**

総評の項目立ての話に戻りますが、全体に共通する論点で扱ったなかには、利用者目線で見たとの使い勝手という点で、今あるコミセンごとの違いについて、合わせられる部分は合わせることを検討してほしいという議論があったと思います。このことも、コミュニティ協議会に対して、あるいはコミュニティ研究連絡会に対しての意見として、総評に記載して良いと思います。

**【委員長】**

利用条件を統一した方が良いのではないかという議論と、コミセンの特性に応じて閉館時間を早めるなど、ルールが多様さをより柔軟に認めていくべきという、2つの方向性の話の流れがありました。

**【事務局】**

利用条件は、第4期の報告書では「気軽に立ち寄れるコミュニティセンター」という項目で扱いました。利用ルールの共通化や改善をコミュニティ研究連絡会で検討すべきことを記載し、今まさにコミュニティ研究連絡会のなかでテーマを出して検討を進めています。

**【C委員】**

今回、防災の話もあったと思うので、改めて記載があっても良いと思います。

**【委員長】**

その辺りは、今の「(4) コミュニティ協議会の情報共有の進め方」を「コミュニティ協議会のあり方」などに抽象化した項目立てに変更し、今のC委員ご指摘の点や、E委員の広報の点等、良い事例の共有ができればと思います。また、抽象化すれば利用条件の論点と近いテーマとして、営利・非営利の考え方についても記載ができるかもしれません。コミセンの窓口の現場でコミュニティ協議会の皆さんが相当苦労されているので、ある程度統一的な見解を出した方がいいのか、あるいは緩めるべきところがあるならどの点なのかについて等記載できればと思います。今取り組んでいることは適切にポジティブに評価したうえで、要望を集約した時に見えてくるものといった形で記載ができればと思います。防災関係はどうでしょうか。

**【副委員長】**

防災は、地域の他団体との連携にも関わる内容になると思います。

**【委員長】**

防災は、市の中でも複数の部署にまたがった議論が必要になり大変です。どこまで提言に記載できるか分かりませんが、例えばどういった場で議論すべきか等、記載できればと思います。総評はやはり、各項目の抽象度を上げる必要があると思います。

**【C委員】**

私は今回の報告書に、市民への提言も記載した方が良いのではないかと思います。今、ボランティアについての考えを、市民と共有できなくなっているように感じます。「コミセンは、ただお客さまになって使うものではないということについて、改めてみんなで考えていきましょう」といったメッセージを記載しても良いのではないのでしょうか。

**【委員長】**

市への提言の後に、市民に対しての提言も記載しましょう。私は市民への提言も大切だと思っています。地域や公共性について、自分には余計なものとする考え方もありますし、全てをビジネスの論理で考える考え方があっても良いと思います。ただ、今コミュニティ協議会を中心に今取り組んでいるコミュニティづくりは、単なる市民サービスを超越するものとして構想してきたものであることが、コミュニティ構想の一番の意義だと思います。単に市民への利便性を与えるだけでなく、市民がコミセンに関わるなかで、地域に対する意識の芽生えや、お互いに対する感性をつくってほしいこと、またコミセンはそうした場であることについて、報告書に記載しても良いと思います。書き方としては「我々はそういうものと考えている。だから市民もこのことについては考えてほしい。そうした考えがなくなれば、コミセンは維持できなくなる。それは市民の判断に委ねられていることだが、もしなくしたくないなら市民も知る努力をしてほしいし、市は市民がこのことについて知れる努力はする」等が考えられると思います。

このことや次の項目「事務負担」について、委員の皆さまからご意見ありますか。

### 【副委員長】

事務負担について、資料2を見るとコミュニティ協議会の事務負担が多く見えますが、日常的な事務負担は窓口の受付業務くらいで、実際にはあまり多くありません。そのため、通年の業務のスケジュールを見えるようにし、各コミュニティ協議会がそれに合わせた体制をとりやすくできればと思います。

### 【B委員】

資料2には、業務を遂行するのに必要な時間が記載されていないので、業務量が見えません。また、おそらく、3～4月に集中しているところが大変なのではないかと推測しますが、コミュニティ協議会として事務について負担感を感じているのはどの部分なのか知りたいです。

### 【C委員】

地域のボランティア団体に指定管理者制度で委託していることにそもそも難しさがあると感じます。ボランティアで担えることに限りがあるなかで、他自治体のコミュニティ施設では、事務は職員が仕事として担うのが一般的です。そうした意味では、やはり制度的にどこかで手を入れていかないと継続的な運営は地域住民の負担が大きいのと思います。

### 【事務局】

資料2についての補足です。項目1～4は年度末の年度末の事業報告と決算関係と、新年度の事業計画と予算関係の作業で、これが項目16の住民総会の資料になります。また項目5は、施設の利用人数等を統計資料のために記録していただいている作業です。NPO法人や町内会など、継続的に公益的な活動をしている団体には、こうした作業は必要になるものだと思います。作成にかかる時間は、毎年度同じ様式ですので、前年度との違いがどの程度か次第だと思いますし、コミュニティ協議会によって、あるいは担当者の慣れによって異なると感じています。あまり大きな負担感を持たずに取り組んでいるコミュニティ協議会がある一方、新しく会計担当になられた方などは、手順を知るところから取り組む必要があり時間がかかっていると思います。また近年は、防災の取組み等、コミュニティ協議会に求められる役割が増えているなかで、地域の防災会との連携など新しく取り組むべきことへのプレッシャーが負担感に繋がっている面もあるだろうと感じます。

### 【委員長】

IT化が進むなかで事務への負担感が大きくなっているコミュニティ協議会もあれば、防災などの期待される役割について丁寧に取り組めば取り組むほど大変になるという点で負担感が大きくなっているコミュニティ協議会もあります。やはり、事務負担に留まらず「活動の負担感」等と項目名を抽象化したうえで、考えられる負担感について整理しながら記載できればと思います。IT化に伴う事務への負担感であれば、市がITへのサポート体制を設けたり、市が負担を軽減したり、支援のあり方を記載できると思います。一方、防災のように日々の細々とした取組みや調整は支援が難しいので「みんなで検討していきましょう」といった書き方で良いと思います。

つまり目指す方向は、持続可能なコミュニティ協議会の運営だと思います。持続可能であるために、コミュニティ協議会への参加の負担感を減らし、支援を考えることになります。

### 【C委員】

先ほどコミュニティ協議会の継続のためには制度的な課題があると言いましたが、コミセンに仕事があるから人が集まるという表裏一体な側面もあると感じますので、やはり事務を外部化し

たら解決する話でもないと思直しました。負担感はコミセнгとの課題である点が、解決しにくいところだと感じます。

**【副委員長】**

機械的に作業できる会計事務もある一方で、事業の展開次第で動きが変わってくる会計事務もあります。活動とともに動いているお金と、固定費として定期的に支払っているお金と分けて考える必要があります。定型的な会計処理を外部化することはできますが、全てを外部化してしまえば、事業とともに展開するお金が分からなくなってしまい、今できていることも、できなくなると思います。大変なのは、会計処理を窓口業務と一緒にやっているところだと思います。

**【委員長】**

コミュニティ協議会との意見交換会では、窓口当番手当の増額要望が多くありました。本委員会では、窓口手当とはいったい何であるかを踏まえたうえで、増額の是非について記載できればと思います。有償ボランティアの手当は、生活保障にはなりません活動へのインセンティブになります。あるいは実費弁償という考えで、実費弁償として手当を支払うなかで、活動をするうえでの必要経費は支出してもらおうという考え方もあります。活動へのインセンティブを、物価高騰のなかで増額することについて、どう考えるかだと思います。

**【B 委員】**

指定管理契約として窓口業務を引き受けるなかで、有償ボランティアだから最低賃金水準を下回って良いという考えに納得できません。窓口担当に常時人がいなくてもいい等、コミュニティ協議会にある程度の自由裁量があるなら最低賃金を割り込んでもいいと思いますが、そうした自由裁量がないなら、世間的にも納得が得られないのではないのでしょうか。

**【委員長】**

この議論の難しさは、給与になると雇用関係が発生してしまうことです。雇用関係を発生させることもできますが、その場合には膨大な調整コストが発生します。現状はそのコストをコミュニティ協議会の皆さんが担っていることになりませんが、有償ボランティアという形をとることで、ある意味ではより安いコストで市民にサービスが提供できる仕組みとなってきたということです。この現状を変えるか変えないかが、おそらく今大きな判断ポイントだと思います。

**【B 委員】**

雇用契約を結ばずボランティアという形を維持しながら、最低賃金と同じ水準に窓口手当を引き上げることはできないのでしょうか。

**【副委員長】**

窓口担当者はコミュニティ協議会の運営委員です。つまり、窓口担当をするために雇われているのではなく、コミュニティ協議会の運営という趣旨に賛同して運営委員になっており、その運営委員が、窓口担当として時間拘束された分を実費弁償している形です。近年「窓口担当の人材不足は、窓口手当が低いためだ」という意見もありますが、それ以前の段階で、もし運営委員への理解がなければ窓口担当は単なるアルバイトになってしまいます。例えば、窓口担当を外注した方が市民への「サービス」は改善するかもしれませんが、地域コミュニティにおいて求められているのはそこではないと思います。私は、窓口手当で最低賃金と勝負する気持ちはありません。

**【C 委員】**

窓口手当を最低賃金の水準に合わせるようになった時には、それは貸館業とコミュニティづく

りの2つを分けて考えることにまで繋がると思います。だからといって、この話を議論に乗せない訳ではありませんが、単に手当を増額するだけで解決する問題ではないと思います。むしろ手当の増額により、お金を受け取っていることへのプレッシャーが増え、ボランティア運営という理解の得方もできなくなります。とはいえ物価高騰のなかで増額が必要という気持ちがあります。

**【副委員長】**

有償ボランティアの形をとりながら、物価高騰に伴う手当の増額の落としどころを探しているということです。

**【委員長】**

今のC委員のご意見は、雇用関係でないことの積極的な意味を評価していくべきではないかというご意見だと思います。もし雇用関係にするなら、窓口業務を外注して完璧なサービスを目指すことができますが、その関係は契約が終われば切れる関係です。今の仕組みの方がいいだろうとする考えを前提にしながら、物価高騰に合わせて水準を上げて良いのかという話だと思います。今後も物価高騰に合わせて、手当を増額していくべきかは、継続して議論が必要だと思います。やはり新しい運営委員に、窓口手当が給与でないことの意味を伝えていくことに意味があると思います。

他に皆さまご意見いかがでしょうか。ではここまで、ありがとうございました。委員の皆さまから毎回柔軟な意見をいただいているので、ご意見を踏まえて素案の修正に取り組んでいきたいと思っています。以上で、本日の議論は終了します。3のその他について事務局よりお願いします。

### 3 その他

**【事務局】 次回委員会の内容について説明**

### 4 閉会

**【委員長】**

ではこれで全ての議事が全て終了しましたので、第4回第五期コミュニティ評価委員会を終了します。皆さま、ありがとうございました。